

坂本東嶽が目指した理想の村づくり



■一丈木公園から町を見渡す理一郎の銅像

現

在の一丈木地区周辺から放射状に広がる道路と、その両側に佇む松・杉並木。その近くの高台には一丈木公園があり、人が集う。

これらは、偉大な先人である「坂本理一郎(東嶽)」の村づくり構想により明治30年代に整備されたものです。当時としては画期的であった幅6メートル前後もある道路や見事な松、杉の並木道は、その景観が新・日本街路樹100景(読売新聞社)に選ばれたこともあります。

今に残る理一郎の理想の村づくり。それはいったいどんなものだったのでしょうか。

理一郎の生い立ち

理一郎は、文久元年(1861年)旧千屋村に、父藤兵衛、母しげ子の長男として生まれました。幼いころから漢文や漢詩の素養があり、10歳になった年に六郷村の熊谷松陰に師事し、儒学や和漢を学んだといえます。

14歳の時に、先進的な政治、経済を学ぶため慶応義塾に入学した理一郎は、後の総理大臣である犬養毅と出会い、友人、また政友として親交を深めました。

その後、20歳代で県議会議員、30歳代には衆議院議員として活躍しましたが、政治的人材がことごとく都会に集中し、地方農村が立ち遅れていくさまを憂い、代議士を辞して故郷へ帰る事を決意します。

明治29年、理一郎36歳の時でした。

坂本東嶽が目指した理想の村づくり



■現在の一丈木公園



■理一郎の銅像が作られた当時の一丈木公園



■松・杉並木



■現在も一部が残る坂本東嶽邸



■坂本理一郎(東嶽)

理一郎の村づくり

故郷へ戻った理一郎が最初に着目したのは原野の開発でした。当時は荒地であった一丈木台地を公園にし、公園の下に役場、学校、郵便局などの公共施設を配置して、村の心臓部をつくる。さらにそこから各地区へ向けて6本の直線道路を放射状に配し、その両側には松、杉を植栽し、並木道を作りました。

この構想は単に外見的な事だけではなく、どの地区にも属さない原野に、村の中心となる施設を配置することによって、藩政時代の旧村意識が抜けきらない村民感情を緩和し、一歩進んだ一体感を培うところに真意があったといわれています。第二の構想は、農業生産性の向上でした。千屋村農会が創立されるとその初代会長となり、乾田馬耕の奨励、指導に心血を注ぎました。こうした活動のおかげか、明治35年には秋田県内でも最初に属する耕地整理が始まっています。

また、現金収入を確保するため養蚕・果樹などを奨励したほか、地質調査の実施、指導者を招いての技術の伝授など、常に先進的な取り組みを推し進めました。

第三の構想は、教育の振興です。次代を担う青年層に着目し、千屋青年会を結成。会長として熱心に指導に当たり、農閑期を利用して討論会、演説会、夜学会などを実施しました。

また、現在の千畑小学校周辺の土地を教育用地として確保し、公共施設などを建設。広大な土地に桑畑を造成して養蚕を行い、その収益を教育資金に充当しました。そのために多額の私費を投じています。

東嶽精神

晩年体調をくずし、静岡県で静養していた理一郎ですが、大正6年(1917年)57歳で帰らぬ人となりました。

しかし、こうした私心のない高潔な理念、郷土を愛する心、雄大な思想は「東嶽精神」として、教えを受けた青年たちに受けつがれ、今に至ります。